
想い出を生きよう

蒼風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

想い出を生きよう

【Nコード】

N5076I

【作者名】

蒼風

【あらすじ】

事故で記憶を失いながらも、そんなことあまり気にせずに生きる少年と。

心配してるけど、どっちも同じだし別にいっかゝって思っで見守る少女の話。

「ねえ、明日、暇？」

「あ？ああ、別に予定ねえけど」

「じゃあさ、明日、私に付き合ってよ」

「やだ」

「なんでよ!?!」

「だるいから」

「それだけかい!!」

「充分だろうが」

「まったく・・・だめだよ、そんなこといったら・・・もう・・・」

「・・・おまえってさあ、俺の弱点、わかってるよな・・・」

「え？」

「・・・なんでもねえよ・・・何時だ？」

「・・・え？」

「だから、何時に待ち合わせだ??」

「……えっと……お昼を向こうで食べたいから……
10時頃かな」

「わかった。んじゃ、いつもの場所でいいな?」

「うん……冬司……」

「あ?」

「ありがとう」

「ばっか、なにいつてんだよ……じゃあ、またな」

「うん……おやすみなさい」

「ああ、おやすみ」

「遅い……」

汗で湿った時計をわずらわしく想いながら、俺はぽつりと呟いた。
文句を言いながらも、再び腕に視線を落とす。

アナログの針は十時半を示している。

待ち合わせは十時だったはずだ……そう、つまり俺は……。

「待たされてる……ってわけだ」

誰にともなく呟く言葉。

その言葉が改めて意識させたらしく、俺の眉がへの字に曲がってゆく。

「……あのバカ、自分から言いだしたっていうのに、なんで待たせてるんだよ……」

俺は目を閉じると、深い深いため息をついた。

駅に必ずといっていいほどおかれている、意味のよく分からない銅像。

飛翔やら希望やら、やけに抽象的な名前が付けられているだけでなく、「お前の希望は、う　かい!!」っていうつつこみを思わずいれたいような銅像は、ほとんどの場合待ち合わせ場所となる。

それは同時に、その周辺の人口密度を異常なほどあげる結果となるわけだ。

芋を洗うかのようにわらわらと集まっている人々を横目で見ながら、俺は何本目か分からないたばこに火を付けた。

以前からひねくれ者だったらしく、待ち合わせするときは人と違う場所にしてしまう。

今俺がいる場所も、待ち合わせ場所として定番のオブジェから50メートルほど離れた場所だった。

周りには目印になるようなものはなにもない。

だが、別にかまわなかった。

俺とあいつが知っていれば、それで充分なんだから。

煙草の灰が挟んだ指の近くまでやってきたので、ポケットから携帯用灰皿を取り出して中に入れる。

ささくれだった心を落ち着かせるように大きく深呼吸した俺の視界のすみに、見慣れた黄色いワンピースが揺れた。

「ごつめくん、まった？」

「ごめんじゃねえだろ・・・もう、30分だぞ？お前から誘ったって言うのに・・・んで、理由は？」

「う・・・女の子に遅れた理由を聞くなんて、野暮ってものよ」

「はあ・・・寝坊だな？」

「・・・う」

「まあ、いつものことだから、別に気にしてねーよ」

「ほんと？よかった」

「ああ、晩飯、松竹庵の焼き肉でいいぞ」

「・・・・・・鬼」

「はっ、聞こえんなあ」

「・・・・・・それでいいです・・・」

「よろしい」

俺は笑いながら歩き出した。

その後ろでは、今晚の出費を思っただけでも暗く・・・まるで世界の終わりを自分一人だけが知らされたかのような落ち込みようで、女が歩いてる。少し気の毒になった俺は、後ろを振り返るとそいつの頭を軽く小突いた。

「おら、くれぐれぞ。仕方ねえから、昼飯はおごってやるわ」

年に一度の確率でしか発動しない、最終兵器「優しい言葉」で胸を射抜かれた女は、子犬のような目で俺を見上げた。

「・・・・・・ちょっとかわいいかもしれない。」

「・・・冬司？冬司ってば」

「お？ど、どうした？？」

破壊力抜群の微笑みで陥落していた俺の意識を、女が揺り起こす。

（あ、危なかったかも・・・）

「どうしたって、こっちのセリフでしょ？大丈夫？？」

「ああ、大丈夫だよ。じゃあ、沙智、そろそろ行こうぜ」

「うん」

俺の呼びかけが、沙智の微笑みを生んだ。

二ヶ月前、事故にあった。

梅雨なのに、間違つて夏が来てしまったかのような晴れの日。久しぶりに吹いた心地よい風に誘われ、俺はバイクに命を吹き込んだ。

お気に入りのコース。

ゆつたりと走り、海を眺め、土産をつんで帰ってくる。

そんな当たり前な、でも俺にとっては大切な時間。

夕日に後押しされながら走っていたとき、不意に時間が止まった。俺の目の前に小さな何かが飛び出してきた。

目を見開く。瞳の中に、恐怖に顔を歪ませて硬直する男の子が飛び込む。

そして俺は……その子を守るためにアスファルトに向かつてダイビングした……らしい。

そう、「らしい」のだ。

病院で目覚めたとき、俺の頭の中は見事なくらい真っ白だった。

なんもなかった。

からっぽだった。

異常とも言える事態に、俺は呆然ともしなかった。笑うしかなかった。

笑いながら涙が出た。

そのとき……大きな瞳に涙を一杯にたたえながら抱きしめてくれたのが……沙智だったんだ。

俺の恋人なんだそうだ。

これっぽっちも記憶の残っていない俺には、はっきり言って実感が湧かない。

好きだつて気持ち、愛しいって想いも、なんにも浮かんではなかった。

だけど……暖かかったってことだけは……覚えてる。

んで、俺は人生をやり直す羽目になっちまったんだが、幸いにも

俺の失ったものは「思い出」って奴だけだったので、日常生活にはなんの支障もなかった。

思いつきりご都合主義である。

だけど、この世界の神様（作者？）がせっかくそういうことにしてくれたんで、素直に甘えておこう。

もとをただせば、事故にあつたのも記憶喪失になつたのも、バカ神のせいだが、文句を言つてはきりがない。

人生あきらめも肝心だつて悟つた、21歳の大学生であつた。

あ、それともう一つ、忘れちゃいけない事故による副作用がある。人格が変わつたんだ。

昔は少し大人し目の、穏やかな性格だつたんだが、記憶を失つてからは180度かわつちまつた。

明るくなつたんだ。

沙智に言わせると、「墮落した」つてことになるらしいんだが・
・・まあ、笑いながら言つてたんで冗談だろう。

うん、冗談つてことにしておこう。

とりあえず、どんなに変わろうが俺が冬司つてことには変わりないんで、そんなに大した問題じゃない。

「んで、なんで俺はこんな所を息を切らせて登らなきゃいけないのかな、沙智さん？」

「えゝゝゝなんか言つたゝ？」

俺の五十歩ほど先を歩く沙智の声が、微かに届いた。

「ゝゝゝゝなんでもねえよ」

いろんなあきらめが胸の中をよぎり、言葉が出なくなる。
今登っているのは、山だった。

丘でも、平原でも、ましてかわいいねゝちゃんがいる海であるわけもなく、山。

富士山や八ヶ岳レベルじゃなくても、素人には少しきつい高さを持つている場所を、なんで俺が登らなくてはいけないのか。

すでに二時間ほど歩いている俺は、そんな基本的な疑問も気にならなくなってるほど疲れ果てていた。

遅れてきたあいつと合流した後、約束通り昼飯をおごり、町中を少しふらついて、駅に戻ってきたのが二時半。

んで、駅のトイレに行き、待ち合わせた改札に向かうと……フル装備を地面においてにこにこしている沙智が待っていた。

……説明を受けるまでもなく、彼女がやろうとしていることを察してしまった俺は、全速力で逃げ出そうとしたが、平気な顔で追いついたあいつに肘の関節を極められ、痛みで声も出ない状態ですると引きずられていったのは余談である。

化け物め

「ん？冬司？」

声に反応して顔を上げると、にこにこ微笑む沙智との距離が五メートルほどに縮まっていた。

その笑みの額の部分には、血管が浮き出ている。

はつきりいつて……怖い。

人の思考の中の、しかも消え入るほどの小さな呟きに反応できる沙智……化け物である。

深層心理のレベルでの思考まで読みとられたらしく、彼女の笑顔がより明るくなる。

当然のように額の血管は本数を増してるけど……。

「な、な、なんでもないです……」

声は震え、無意識のうちに涙が溢れ、膝が笑い出す……外から見れば俺の顔は真っ青になっているだろう。

なんでこんなに怖がっているか……それは正直言って俺自身にもわからない。

いふなれば、俺の生存本能といえる部分が何かを感じていた。

俺の失われた記憶の向こうで、何かがあったのだろうか？

そう思った俺は、その頃の冬司くんに同情を向けていた。

「着いたよ、冬司」

「ご、ごめんなさい!!」

「??」

俺の過剰とも言える反応に、沙智が不思議そうな顔を向けていた。

「・・・・・・あれ？」

「どうしたの？そんなに疲れちゃった？」

心底心配そうな表情をしてくれる沙智に、少しだけ申し訳ない気持ちを抱きながら、ぎこちない笑みを顔に貼り付けた。

「ああ、大丈夫だって。ちょっと考えごとしてた・・・・・・んで、どした？」

「そう・・・・・・ん、着いたよ、目的地に」

「目的地って・・・・・・ここ？」

「うん、そう」

「でも・・・・・・」

俺は言いよんだ。

ぼんやりと歩いていたせいか、自分でも気づかないうちに頂上まであと一歩というところまで来ていた。

周りはほとんど夜と化している

ここからでは見えないが、もう少し進んで頂上に立ってみれば、遠くの山々に沈もうとしている夕日が見れるだろう。

たしかに、その光景は美しいかもしれない。

だが、それだけだ。

想像を超えた美しさというわけではないだろうし、自分はそんなものに心震わせるような人間ではない・・・・・・と思う。

だから・・・・・・彼女が、どういう意図でここまで連れてきたのか分からなかった。

戸惑いを浮かべている俺に気づいたらしく、沙智の顔がいたずらめいたものになる。

「ほらほら、そんなにがっかりしないの。こっちまで来れば、すっごくいいからさ」

そう言ったと同時に、俺の傍らから一気に頂上まで駆け上がった。

小さい彼女から生まれた影が、俺の方まで背伸びしてくる。

輝いている後ろ姿を見ながら「やれやれ」とため息をつく、最後の力を振り絞って彼女の後を追った。

動けなかった。

その場に縛り付けられた。

感動つてもんが・・・生まれ変わって初めて分かった気がするんだ。

街で見ている夕日とは違って、山の頂上から見下ろす紅の太陽はとても輝いて見えた。

そう、茜色よりも少し強い、でも人の心を落ち着かせる色。

夜の訪れを告げる藍と、昼の残り火の紅が混ざり、進み行く刻が紫に輝く。

長い飛行機雲が川のせせらぎにも見えた。

「大自然の美しさ」なんていうあたりな言葉には、興味なんて無かったのに・・・何故だろう、すごく・・・すごく懐かしい。

声もなく立ちつくしていた俺の頬に、穏やかな微笑みを浮かべた沙智の指が、そっと触れた。

その時初めて、自らの頬を伝う熱い水滴に気づく。

「あ・・・れ・・・？」

心がぶっこわれちまったかのように、自分の意志とは関係なく溢れてゆく涙に戸惑う。

「どうし・・・て・・・だ？」

「・・・やっぱり、心は覚えてるんだね」

「え？」

涙を拭うことも忘れ、彼女の方を向く。

彼女の優しい微笑みも、涙で染まってる。

そう、それは・・・優しい涙。

「この場所はね・・・冬司が教えてくれたんだ」

「俺・・・・・・・・が？」

「うん・・・・・・・・私が落ち込んだとき、いつもここに連れてきてくれた。受験で悩んだときも、友達と喧嘩したときも、自分に自信をなくしたときも・・・・・・・・。うん、あのときの冬司はさ、口べただったでしょ？だから、暖かい言葉とか、そんなもの、全然言うことができなかったんだ。だけど、その分、態度で示してくれた。ここに連れてきてくれて、ただ黙って私の話を聞いてくれて・・・・・・・・その間中ずっと手を握ってくれてた。それだけで・・・・・・・・それだけでも暖かかったんだ」

その言葉を聞いて、少し・・・・・・・・いや、かなり落ち込んだ。体が震えた。

その震えが伝わったかのような小さくか細い声で、目の前の彼女に対して尋ねる。

「だから・・・・・・・・俺のこと・・・・・・・・好きになったの？」

「うん」

いつの間にか座り込んでいた、彼女の横顔。

その顔には穏やかな優しさ・・・・・・・・懐かしいものを想うときの表情が浮かんでいた。

・・・・・・・・苦しく・・・・・・・・なる。

「・・・・・・・・ご・・・・・・・・め・・・・・・・・ん。俺・・・・・・・・冬司くんを・・・・・・・・とちまつて・・・・・・・・。お前から、冬司くんを・・・・・・・・うばっちまっ・・・・・・・・た」

頭が働かない。自分が何言ってるのか、何を言いたいのかさえ分からなかった。

俺は、彼女から恋人を奪った。

物静かで、口べたで・・・・・・・・でも、優しい、本当に優しい青年を・・・・・・・・うばっちまった。

俺のせいで・・・・・・・・俺が生まれたせいで・・・・・・・・。

「・・・・・・・・冬司？」

驚いた顔をした沙智から、目を背ける。

で、冬司のこと見てたんだよ？だから、誰よりも冬司のこと知ってる。誰よりも冬司のこと想ってる。だからさ……だから、私を信じて。他人も、自分も信じられなくなったときは、私を見てよ。私の中にある、冬司を信じて……よ」

涙が浮かんでいた。

彼女の心の中から流れ落ちるかのように、後から、後から、涙があふれ出てきた。

こいつでも泣くんだ……なんて思うよりも早く、俺の体は動いていた。

……気がつくと、彼女の体は俺の胸の中にあつた。

驚いた顔の彼女。

だけど、それはすぐに笑顔に変わる。

安心しきった、子猫の顔。

俺の胸に、顔を埋める。

その行為が暖かくて……とても愛しくて……俺の心が震えてゆく。

「……やっぱり、前の俺も今の俺も同じだな……」

女の好みが、おもいつきりかぶってるわ。

小さな苦笑を、怪訝そうに見上げている沙智。

「ああ、なんでもない。……ちょっと悔しいよな」

「え？なにが??」

「記憶がないことが。……前の俺ってさ、お前とどれくらい付き合ってたわけ？」

「えっと……一年半……かな？」

それがどうしたの？と目で訴える沙智に、もう一度苦笑を返す。

「ああ、こんないい女と一年半もの思い出があるなんて、冬司くんにちよつと嫉妬するっていうか……さ。自分の記憶の中にないなんて、もったいないなって」

俺の言葉に、彼女の顔がみるみるうちに紅く染まってゆく。

どうやら、「いい女」という言われ慣れてない言葉が、彼女を照

れさせたらしい。

どっちの冬司も、普段いわねーからなあ……。

おかしくなって笑いかみ殺していた俺の顔を、沙智がにらんだ。やばいつ……って思ったときには、俺の唇が暖かいものに襲われていた。

とたんに真っ赤になる俺の顔。

同じように真っ赤のままの沙智が、表情を隠すようにさらに深く俺の胸に顔を埋める。

「大丈夫だよ。思い出がなくなつて、全然大丈夫だよ。だって、今、私と一緒にいるってことが、冬司の思い出になつてるんだから……今、この時間を過ごすことが……思い出を生きてるってことになるんだから」

震える声が、胸に直に触れる。

胸を越えて、心の中に入ってくる。

いつもなら「くさいセリフ」って笑い出してしまふ俺も、このときだけは笑えなかった。

そのとおりだな、なんて……らしくないことを思っていたから。

夕日が山の向こう側に消え、天空で星達が瞬きだす。

目を細めながら、俺はその新しい思い出を、胸に焼き付けた。

そのあと、二ヶ月ぶりに、土産を買って帰った。

彼女と、俺と……そして、二ヶ月前の冬司くんのために。

(後書き)

昔かいた短編です。

十年近く前に書いたけど、いまとあまり変わってない……ってか、成長がないのか？？（ ; ; ; ; ）

気に入って頂けたらともうれしいであります、隊長！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5076i/>

思い出を生きよう

2010年10月28日06時39分発行